Nagoya City University

名古屋市立大学　人文社会学部研究紀要　第20号　2006年３月

現代アメリカにおける移民研究の新動向（上）

――トランスナショナリズム論の系譜を中心に――

村　井　忠　政

はじめに

いま地球的規模でグローバリゼーションが急速に進み、国境を越えたヒト・モノ・情報・資本等の流動化が見られる。この現象は日本では国際化、ボーダーレス化などとも呼ばれているが、この現象は一面では世界各地の人間の生活における経済的、政治的、社会的、文化的つながりの強化と画一化をもたらしているが、半面ではむしろ地域の民族的異質化と文化的活性化を促進しているとも見られる。グローバリゼーションに伴い、地球的規模でのヒトの国境を越えたトランスナショナルな移住が激しくなっただけでなく、かつての国際的な移住には見られなかった国境をまたいだ「トランスナショナル・コミュニティ」や「社会的ネットワーク」が形成されつつあると主張する議論がアメリカの移民研究者の中から出てきている。国際移民に見られるこの現象を「トランスナショナリズム」と呼び、旧来の移民研究で用いられてきた概念道具ではこの新しい現象を解明できないと主張し、「トランスナショナルな視座」からのアプローチの必要を説き、いわば移民研究におけるパラダイム転換を迫る主張が現われてきたのである[1]。

本稿の目的は、グローバリゼーションの進展と共に全地球的な規模で活発化しつつあるトランスナショナルな移住のなかでも、とりわけアメリカ合衆国における移民研究の新しい動向に注目し、「トランスナショナリズム」をめぐる近年の研究の系譜の中から主要なものを紹介し、そこにおける争点を取り上げ検討を加えることにする。そうすることで、トランスナショナリズム研究の背景と問題点を明らかにしたい。

Ⅰ　現代アメリカにおける移民研究の動向

1965年の移民法改正によって、アメリカ合衆国政府の移民政策に根本的な転換がみられ、移民受け入れの基準が大きく変わることによって、それ以前はヨーロッパ諸国からの移民に偏ってい

[1] アメリカの移民研究におけるトランスナショナルな視角を紹介した邦語論文としては、次の文献が参考になる。広田康生著「越境する知と都市エスノグラフィ編集―トランスナショナリズム論の展開と都市的世界」渡戸一郎・広田康生・田嶋淳子編著『都市的世界／コミュニティ／エスニシティ―ポストメトロポリス期の都市エスノグラフィ集成』明石書店、pp.14～46.「小井戸彰宏著「グローバル化と越境的社会空間の編成―移民研究におけるトランスナショナル視角の諸問題―」『社会学評論』（日本社会学会）Vol. 56 No.2　2005年、pp.381～399.

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

た出身地域にかわって、ラテンアメリカやアジア諸国からの移民が急激に増加し、アメリカ合衆国の移民史における「第２の移民の大波」と呼ばれる現象が生じた。1997年の国勢調査が示すところによれば、ロサンゼルス、ニューヨーク、シカゴをはじめとする８つの主要大都市圏において、移民の第１世代（外国生れ）が約2680万人にのぼり、合衆国総人口に占める割合がおよそ１割を占め、第２世代（アメリカ生れ）と合わせた人口では5000万人を超え、アメリカ総人口の20.5%を占める[2]。

多くの途上国にとって、移民たちが先進国で働き故国に送る資金は、近年非常に重要な外貨収入源となっている。たとえば、2003～04年のメキシコでは移民の送金総額は海外からの直接投資より大きな資金流入となり、2000年のフィリピンでは輸出総額の19%に匹敵した。世界的に見ても途上国の外貨獲得の大きな部分を占めており、90年代に途上国への送金は政府開発援助（ＯＤＡ）総額を凌いだという。ポルトガルら海外への移民を研究しているキャロライン・ブレッテルによれば、海外移民の母国ポルトガルへの送金総額は、1975年の時点で2550万エスクドスにのぼり、2000年の時点の送金総額はＧＮＰのおよそ３%を占めるまでになっている[3]。

こうした現実を背景に、ナンシー・フォーナー、Ｒ・ランボート、スティーヴン・ゴールドらは、アメリカにおける移民研究を概観した研究書のなかで、第２の大量移民時代にアメリカが突入したことを受けて、移民研究は現在新しい段階に入っていると述べている。この新しい移民研究の時代は1970年代から始まり、80年代に拡大し、90年代に爆発的な勢いで広まり現在に至っているという[4]。さらに、かつてのアメリカ移民史的研究が、もっぱらヨーロッパからの移民に焦点を当てていたのに対して、現代の移民史研究ではラテンアメリカとアジアからの移民に焦点が当てられることが圧倒的に多くなり、ヒスパニックやアジア系の移民を対象とする研究はますますその数を増してきている[5]。その結果、ラテンアメリカやアジアからの移民の第２世代や第３世代の中からも移民研究者が出てきている。いまや移民研究は狭い意味での移民研究の枠を超えて、現代アメリカ社会一般の問題になっていると言っても過言ではない。

---

[2] Alejandro Portes and Ruben G. Rumbaut, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, University of California Press, 2001, pp.19~20.

[3] Caroline Brettell, *Anthropology and Migration: Essays on Transnationalism, Ethnicity, and Identity*, Alta Mira Press, 2003, p.50.

[4] Nancy Foner, Ruben G. Rumbaut, and Steven J. Gold, eds., *Immigration Research for a New Century: Multidisciplinary Perspectives*, Russell Sage Foundation, 2000, p.3.　ちなみに、アメリカにおける移民研究の第１世代は20世紀初頭の東欧・南欧からの新移民の研究に取り組んだ、ロバート・パークに代表されるシカゴ学派と呼ばれるシカゴ大学の社会学者たちである。彼らの研究の焦点は、新移民に対する差別や移民が都市に与える影響（例えばインナーシティにおけるスラムやゲットーの形成）の問題に当てられた。第２世代は大恐慌期から1960年代までの20世紀半ばの40年間に及ぶ移民中断期であり、そこでの移民研究の焦点は移民の第２世代と第３世代の同化の問題に、第２次大戦後は人種・民族関係をめぐる争点に焦点が当てられた。

[5] *Ibid.*, p.5.

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

Ⅱ　トランスナショナルな移住の研究

1　「トランスナショナルな移住」への注目
—マッシーらによる「社会的ネットワーク」の研究—

シカゴ大学の社会学者マッシーを中心とする研究グループは、メキシコからアメリカへのトランスナショナルな移住の恒常化をめぐる経験的調査から生み出された移民システム（migration system）の研究で知られている[6]。

メキシコと合衆国との間の国境を越える労働者の移動は長い歴史を持っており、したがってメキシコ－合衆国間の移民の研究も長い歴史をもつ。これまでにメキシコ人労働者が合衆国に越境してきた時期としては、19世紀末から20世紀初頭にかけての時期、第１次大戦期間中、1920年代、そしてとりわけ多かったのが1924年から1964年にかけての「ブラセロ計画（Bracero Program）」にもとづく40年間に及ぶ契約労働者の大量移入の時期であった[7]。

1980年代までにメキシコからの移民（そのなかには国境を不法に越えてきた非合法移民が多く見られる）が大挙してカリフォルニア州やテキサス州などアメリカ南西部の都市に住みつき、その結果これらの地域における人口の人種民族的構成が劇的な変動を遂げた。アメリカの週刊誌『タイム』は、1990年の特集号「メルティングポットを超えて」で、ヒスパニックやアジア系の人口がこのままの趨勢で伸びつづけていくと仮定すると、21世紀半ばには白人がマイノリティに転落し、「アメリカの褐色化（Browning of America）」が実現するとの予測を立てている[8]。

マッシーらは、メキシコ西部の４つの異なる地域の移民送り出しコミュニティを調査対象に選んでいるが、その４つの移民送出コミュニティとは①アルタミラ（Altamira）、②カミトラン（Chamitlan）、③サンチアゴ（Santiago）、④サン・マルコス（San Marcos）であり、①と②は農業地域の農村に立地し、③と④は工業地域の都市に立地している[9]。彼等がこれらのコミュニティを選んだのは、これらのコミュニティが他の地域に較べて特段多くの移民をアメリカに送り出しているからではない。彼らのねらいはできるだけ多様な地域特性をもつコミュニティを選ぶことで比較研究を可能にし、一般化への道を開くためであった。

この研究で用いられている方法は、エスノサーヴェイ（ethnosurvey）と呼ばれるアプローチであり、それは人類学者によってしばしば採用される民族誌的フィールドワークと社会学的なサンプリング調査や人口統計学的データをむすびつけたものである。いわば質的調査と量的調査を結

---

[6] Douglas S. Massey, Rafael Alarcon, Jorge Durand and Humberto Gonzalez, *Return to Aztlan: The Social Process of International Migration from Western Mexico*, University of California Press, 1987.

[7] ブラセロ・プログラムによってアメリカ合衆国政府は、農業労働者の不足を補う目的のために、メキシコ政府との間に取り決めた協定に基づいて、６ヶ月間の契約でメキシコ人労働者を採用した。

[8] 'Beyond the Melting Pot,' *TIME*, April 9, 1990, pp. 24~27.

[9] Douglas S. Massey et al., *op. cit.*, pp.22~38. 詳しくは第３章（A Profile of Four Communities）を参照されたい。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

びつけることで、それぞれの手法がもつ長所を活かし短所を補うことで移民研究のより豊かな成果が期待できると考えたからである[10]。

メキシコからアメリカへの移住には次の３つのタイプが見られるという。

第１のタイプは一時的移住（temporary migration）と呼ばれる。このタイプに入る移民はターゲット・アーナーと呼ばれ、短期間（通常１年以内）に目標とした額の金を稼いで帰国する。一時的移住のタイプは30台の既婚の移民男性に多く見られ、そのほとんどが非合法移民であって、アメリカ社会にほとんど統合されていない。

第２の回帰的移住（recurrent migration）と呼ばれるタイプに属する移民は、メキシコにおける生活水準を上げるために、メキシコとアメリカの間を定期的に往復する若年の単身者に多く見られる。これはさらに２つの変形に分類される。ひとつは季節的移住（seasonal migration）と呼ばれ、カリフォルニアなどで労働集約的な農業労働に従事する移民たちであり、もうひとつは周期的移住（cyclical migration）と呼ばれ、短期の契約で工場労働に従事する移民たちである。

第３の定着移住（settled migration）と呼ばれる類型に含まれる移民は、合衆国に永住することを決意している合法的な移民であり、前の２つのタイプがアメリカ社会よりはメキシコのコミュニティとの絆がより強いのに対して、アメリカ社会にもっともよく統合されているタイプである。とはいえ、彼等のメキシコの出身コミュニティとの絆が断ち切られることは決してない[11]。

マッシーらはアメリカ側に形成されているコミュニティの調査をも行い、特定の地域間に「トランスナショナル・コミュニティ」や「社会的ネットワーク」（social network）が形成されており、その結果たんなる一方向的な移動を超えて恒常的かつ双方向的な人間の流れが形成されていることを明らかにした。マッシーらは、この社会的ネットワークが移民の移動を支援し、情報を提供する重要な機能を果たしている事実を強調する。この社会的ネットワークは親族、友人、同郷者―スペイン語でパイサナーヘ（paisanaje）と呼ばれメキシコにおける同じコミュニティの出身者を意味する―の人間関係を基礎としており、互助組織としての性格をもつ。すなわち、メキシコからアメリカに移住してきたばかりの新顔の移民が、アメリカの地域社会に定着し、仕事を見つけるまでのあいだ、この社会的ネットワークがなにくれとなく生活の世話をやいてくれるのである[12]。

マッシーらは、この確立したシステムのなかでの家族やコミュニティの成員の移動パターンとその影響の分析を行い、同時にトランスナショナルな視座にたった移民研究者を育てている。しかしながら、マッシー自身は移民システム論の枠組で実質的には社会経済的側面の多くがカバーされていると考え、トランスナショナルな視座に対して一定の距離をおき、その理論的枠組の曖

---

[10] Douglas S. Massey et al., *op. cit.*, p.10~21.
[11] *Ibid.*, pp.174~180.
[12] *Ibid.*, pp.139~171.

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

昧さを指摘しているという[13]。

2　積極的トランスナショナリズム論の登場
—パラダイム転換を迫るシラーらの試み—

ニーナ・グリック・シラー、リンダ・バッシュ、クリスチーナ・ブランクースザントンらの人類学者の研究グループは、カリブ海諸国からニューヨークなどアメリカの都市へのトランスナショナルな移住を研究した結果、そこに彼らが「トランスナショナリズム」と呼ぶ新しい現象が見られると主張する。

「トランスナショナルな移住」ないしは「トランスナショナリズム」を新しい現象として位置づけ、その学問的定義を試みる最初の本格的学術会議（ワークショップ）が開催されたのは、1990年の５月であった。このワークショップの報告書をもとに、1992年７月に『ニューヨーク・アカデミー・オブ・サイエンセズ』誌が特集「移住に関するトランスナショナルな視座を目指して」を組んでいる[14]。このワークショップのオルガナイザーであり、この特集号の編者でもあるシラー、バッシュ、ブランクースザントンの３者はこのワークショップに先立って、次の３つの研究項目（research agenda）をあげている。①トランスナショナルな移住が、いかにして包括的かつグローバルな資本主義システムのなかで形成され、同時にそれが反対にグローバルな資本主義システムに貢献しているかを検討する。②社会科学者たちが移住研究にアプローチする際に用いてきた通念としての分析的な範疇（カテゴリー）——たとえば「恒常的移民」（permanent migrants）「還流型移民」（return migrants）「一時的移民」（temporary migrants）「一時滞在者」（sojourners）などの——の有効性について検討する。③トランスナショナルな移民たちが、いかにして自らの人種的、民族的、階級的、国家的、ジェンダー的アイデンティティを形成しているかについて分析する[15]。

ここで改めてシラーらによるトランスナショナリズムの定義を紹介するなら、トランスナショナリズとは「移民による、その出身社会と受け入れ先の定住地とをつなぐ、持続的で多層的な社会関係を生み出す様々な社会過程を指し、現在の移民たちが形成する、地理的、文化的、政治的境界をまたいで社会的領域が形成されるプロセスを指す」[16]。

シラーらは、トランスナショナリズムについて論じた論文の冒頭で、「われわれが従来使ってきた移民の概念は、もはや時代遅れになっている」として、次のような大胆に踏み込んだ議論を

---

[13] 小井戸彰宏「国際移民システムの形成と送り出し社会への影響—越境的なネットワークとメキシコの地域発展」小倉充夫編『国際移動論—移民・移動の社会学』三嶺書房、1997年、33頁～65頁。

[14] Nina Glick Schiller, Linda G. Basch and Cristina Blanc-Szanton (eds.), Towards a Transnational Perspective on Migration: Race, Class, Ethnicity, and Nationalism Reconsidered, *Annals of the New York Academy of Sciences*, Vol. 645, July 6, 1992.

[15] *Ibid.*, p. x.

[16] L. Basch, N. Glick-Schiller, and C. S. Blanc, *Nation Unbound*, Gordon and Breach Science Publisher, 1994, p.7.

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

展開する。「移民という言葉を聞くと、永久に故国から引き裂かれ、根こぎにされ、古いパターンを投げ捨て、苦心惨憺新しい言葉と文化を身につけるといったイメージが喚起される。ところが今や、新しい種類の移民が台頭しつつあり、彼らはホスト社会と故国の両方にまたがるネットワークや、活動や、生活のパターンを有している。彼らの生活は国境をまたいでおり、２つの社会を１つの社会的領域（social field）にしているのだ[17]。」彼らに言わせると、このような新しい移民の実践的経験や意識を研究するためには、新しい分析道具が必要だというわけだ。シラーらはこのような現代の新しい移民を「トランスマイグラント」（transmigrants）と名づける。

シラーらが具体的な考察の対象としたのは、近年においてハイチ、カリブ海東部、フィリピンの３つの地域からニューヨークへ移民してきた人々の経験であり、これらの移民たちの経験やアイデンティティの持っている複雑さや微妙さを分析するためには、旧来の移民研究の素朴な分析概念では不十分であり、新たな分析枠組が必要であるというのが彼らの主張するところである。要するに、これら新しいトランスナショナルな移民の経験は、「恒常的移民」（permanent migrants）「還流型移民」（return migrants）「一時的移民」（temporary migrants）「一時滞在者」（sojourners）などの従来のカテゴリーではもはや捉えきれないとする認識がここには見られる[18]。

それではシラーらが唱える近年の新たな現象としての「トランスナショナリズム」はいかにして生れたというのだろうか。結論を先取りするなら、この新たな現象は何よりもグローバルな資本主義システムの産物であることが強調される。ここに「従属理論」や「世界システム理論」（ウォーラーシュテイン）の影響を読み取ることは容易であろう。ただしシラーらは、これらの理論が説くように、資本主義のダイナミックな発展過程をグローバルな視座から分析することの必要は認めながらも、他面において、グローバリゼーションのなかで依然として国民国家が果たしている重要な機能について十分に説明しきれないとして、その不十分さを指摘していることも付け加えておかねばならない[19]。

上で述べたような理由から、シラーらは旧来の移民研究に用いられてきた分析枠組が時代遅れになっているとし、それに代わる新たな概念枠組の必要を説いている。移民研究におけるパラダイムの転換を迫るともいえるシラーらのこのような「積極的トランスナショナリズム論」は、しかしながら、移民研究者の間で必ずしも支持されているわけではない。例えば、トランスナショナリズムの出現の要因を、世界的な社会経済システムよりは、むしろ輸送システムとコミュニケーション・テクノロジーの飛躍的な発達に求める立場がある[20]。つまり、これらテクノロジーの急速な進歩のおかげで、今日の移民は19世紀の移民たちとちがって、出身国との絆をいつまでも

---

[17] Nina Glick Schiller, Linda Basch, and Cristina Blanc-Szanton, 'Transnationalism: A New Analytic Framework for Understanding Migration,' *Annals of the New York Academy of Sciences*, Volume 645, July 6, 1992, p.1.

[18] *Ibid.*, p.5.

[19] *Ibid.*, p.7.

[20] Frederic Wakeman. Jr., 'Transnational and Comparative Research,' *Items*, Vol. 42, No. 4, 1988, pp.85~88.

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

保ち続けることができる条件を手に入れたというわけである。さらには、トランスナショナルな移住というものを認めず、古典的な経済学の「プッシュ＝プル」モデルによって今日の移民を観察する研究者も依然として見られる[21]。さらに、トランスナショナルな移住の存在そのものは認めながらも、それが決して新しい現象ではなく、20世紀初頭からすでにそのような現象は見られたとする議論も依然として根強い。例えばナンシー・フォーナーは、ニューヨーク市における移民を対象に、20世紀初頭のヨーロッパからの移民と現代の移民とを比較し、そこに多くの共通点が見出せると述べている。もっとも彼女も、今日のトランスナショナリズムに顕著な独自の傾向が存在していることもまた事実として認めてはいるが[22]。さらにシドニー・ミンツも、19世紀のカリブ海地域における移民の歴史を検討した結果、トランスナショナリズムが質的に過去の移民と異なる新しい現象であるとする主張には誇張があり、したがって「コミュニティ」「文化」「地域」といった伝統的な用語を退けるのは時期尚早であると述べる[23]。

確かに、初期の移民たちの多くは、彼らの故国とのコミュニケーションを必ずしも断ち切ってはいなかったし、故国の政治的運動に参加していたという事実も見られ、その意味では彼らもトランスナショナルな移民であったといえる[24]。にもかかわらず、シラーらは今日のトランスナショナルな移民が新しいタイプの移民であり、その分析のためには移民のトランスナショナルな生活経験に対するグローバルな視座を開発しなければならないと説く。そうすることによって社会科学者たちは過去の移民と現在の移民の類似点と差異とを理解することができるというのだ[25]。

シラーらを中心とする研究グループは、これらの移民集団がニューヨーク市をはじめとする地域に集中し、強い結束力を保ち、母国との紐帯を維持するのみならず、母国の政治過程に積極的な働きかけを行い影響力を行使している事実に注目した。たしかに、トランスナショナルなネットワークの政治的な影響力は、近年きわめ重要なものになってきており、筆者としてもこの点は強調しておきたい。移民たちは国外にいながらも特定の政党や候補に支持を表明したり、資金を提供することで出身国の政治に影響を与えている。さらに近年では、二重国籍が容認され直接在外投票を通じて国内政治に参加しはじめており、出身国政府にとっても彼らは大きな存在となりつつある。例えばネイサン・グレイザーが指摘しているように、メキシコからアメリカ合衆国への移民は、メキシコ憲法の改正により、今日ではメキシコ国籍を保持したまま米国市民になることが可能になっている[26]。

---

[21] Everett Lee, 'A theory of migration,' *Demography*, Vol. 3, pp.47~57.

[22] Nancy Foner, 'What's New About Transnationalism?: New York Immigrants Today and at the Turn of the Century,' *Diaspora*, vol.6 no. 3, 1997.

[23] Sidney W. Mintz, 'The Localization of Anthropological Practice,' *Critique of Anthropology*, Vol. 18 No. 2, 1998.

[24] Bella Vassady, 'The homeland cause' as a stimulant to ethnic unity: The Hungarian American response to Karolyi's 1914 tour, *Journal of American Ethnic History*, Vol. 2, No. 1, 1982, pp.39~64,

[25] Nina Glick Schiller, Linda Basch, and Cristina Blanc-Szanton, *op. cit.*, p.9.

[26] Nathan Glazer, 'Assimilation Today: Is One Identity Enough?' in Tamar Jacoby (ed.), *Reinventing the Melting Pot: The New Immigrants and What It Means to be American*, Basic Books, 2004, p.70.

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

ここでとりわけ注目したいのは、1980年代半ば以降民主化への動きが見られるラテンアメリカやカリブ海諸国で、移民集団が大きな政治的影響力を行使しているという事実である。例えば、ニューヨーク市に居住するハイチ、グレナダ、ドミニカ共和国といった国々の出身者は、選挙資金を集め特定の政党を支持し、また積極的に母国に残る親族・友人へ投票を呼びかけるといった方法で、母国の政治に影響力を拡大しつつある[27]。たとえば、ハイチ共和国から海外へ移住した人々のあいだで、１週間足らずの間に、ハイチでのさまざまなプロジェクトのために100万ドルの寄付金が集められたという[28]。

この背景には、次のような事情があると考えられる。これらの移民集団は、受け入れ社会において差別的な待遇を受け、たとえ経済的に成功した場合でも、社会的・政治的な地位は低いままにおかれることが多い。このため彼（彼女）らは自分たちの出身社会において、高い社会的な評価を得、政治的な影響力を行使することで、自らのプライドを満足させることに関心をもつのである。

シラーらはこのような動きが「脱領土的国民国家（de-territorialized nation states）」と呼ばれる新しいタイプの国民国家を出現させつつあり、もはや国民国家の枠組のなかで国際移動を理解すること自体が問い直されねばならないとした。このような認識枠組の再構築の必要性から新しい研究パラダイムとしてのトランスナショナルな視座を明快に打ち出したのである。

３　トランスナショナリズム論の批判的検討
—ポルテスらによる分析枠組精緻化の試み—

シラーらのグループによる積極的なトランスナショナリズム論の提唱に対して、基本的にはこの新しい移民研究の系譜を継承しながらも、概念の曖昧さなどを批判的に検討することによって、この分析枠組を精緻化しようとする試みがアレハンドロ・ポルテス、Ｌ．Ｅ．グアルニゾ、パトリシア・ランドルトら社会学者の研究グループによってなされている。ポルテスらは、ラテンアメリカ諸国（コロンビア、ドミニカ、エル・サルバドル）からニューヨーク市とロサンゼルス市への移民の比較研究に取り組み、その研究成果を人種・エスニシティ研究の学術専門誌『エスニック・アンド・レイシャル・スタディーズ』（1999年３月号）の特集「トランスナショナリズムの研究」で公刊している[29]。

上述したように、シラーらが積極的なトランスナショナリズム論を展開したのに対して、ポル

---

[27] Linda G. Basch, Nina Glick Schiller, and Cristina Szanton Blanc, eds., *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments, and Deterritorialized Nation States*, Gordon and Breach, 1994.

[28] N. Glick Schiller and Georges Fouron, 'Transnational Lives and National Identities: The Identity Politics of Haitian Immigrants,' in Michael P. Smith and Louis E. Guarnizo, *Transnationalism from Below*, Transaction Publisher, 1998, p. 136.

[29] Alejandro Portes, Luis E. Guarnizo and Patricia Landolt, 'The Study of Transnationalism: Pitfalls and Promise of an Emergent Research Field,' *Ethnic and Racial Studies*, Vol. 22 No. 2, March 1999.

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

テスらのグループは、トランスナショナリズム論が指摘する新しい現象の存在を基本的には認めながらも、シラーらのトランスナショナリズム概念の曖昧さを指摘し、そこから生じる陥穽について注意を促している。そして、これらの陥穽を避けるためにはつぎのような手続きが必要であるという。

第１に、トランスナショナリズムという現象を確定するためには、少なくとも次の３つの条件が必要である。すなわち、①移民と移民を送り出している故国の人々を含むかなりの数の人々がそのプロセスにかかわりを持っていること。②その活動が一時的なものや、例外的なものでなく、一定の安定性と持続性を有すること。③これらの活動の内容が何らかの既存の概念によっては捉えられないものであること[30]。

第２に、トランスナショナリズム概念が曖昧になるのを避けるためには、この概念を狭く限定的に使用すべきである。シラーらがややもすると国境をまたいでなされる「トランスマイグラント」の活動や経験ならすべて無条件にそれをトランスナショナリズムとして捉えようとするのに対して、ポルテスらはそれを国境をまたいだ「定期的かつ持続的な活動」に限定して使用すべきであると主張する。すなわち、トランスナショナルな移住が真に「オリジナルな現象」と呼べるためには、それが「国境を越えた持続的な基礎の上に成立する高密度の交流（exchanges）や新しい形の交渉、そして複合的な活動」でなければならないという[31]。

第３に、ポルテスらはトランスナショナリズムという現象を分析する際の単位を「個人とその支援ネットワーク」に限定すべきであると主張する。コミュニティ、国際的企業、政党、中央政府や地方政府などの単位については、トランスナショナル・ネットワークがより複雑に発展した段階でトランスナショナリズムという活動に参加してくるのであり、分析の手順としては後回しにするのがよいという[32]。

第４に、トランスナショナリズムという活動はきわめて異質で多様な活動のすべてを指して用いられることが多いため、ややもすれば混沌としたものに陥りがちである。そこで、これらの活動を一緒くたに論じるのではなく、次の３つのカテゴリーに分けて論じることが必要となる。その３つのカテゴリーとは、①経済的活動、②政治的活動、③社会文化的活動である。さらには多国籍企業や国家のような強力で「制度化された」アクターの支配のもとにある活動と、移民と彼らの故国における支援組織による「草の根の活動」を区別することが必要であるという。

ポルテスらは、「制度化のレベルの高いトランスナショナリズム」と「制度化のレベルの低いトランスナショナリズム」という用語を使って、以上の議論を表１のように整理している。

---

[30] *Ibid.*, pp.218~219.
[31] *Ibid.*, p.219.
[32] *Ibid.*, p.220.

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

表１　トランスナショナリズムとその活動類型

		経済的活動	政治的活動	社会・文化的活動
制度化のレベル	低い	・国境をまたいだ非公式の商取引 ・帰還移民によって故国に創設された零細企業 ・長距離の周期的労働移民	・移民たちによって創設された郷里の市民委員会 ・郷里の政治団体と移民委員会の同盟 ・故国の選挙候補者のための資金調達活動団体	・アマチュアの国際スポーツ試合 ・移民の拠点で開催されるフォーク・グループの公演 ・郷里の聖職者による海外の教区信者訪問
	高い	・第三世界の諸国に対する多国籍企業の投資 ・海外の旅行市場の開発 ・移民の拠点における故国の銀行の代理店	・領事館員と政党の海外支所 ・故国政府が二重国籍を承認 ・故国の立法府の議員に選ばれた移民	・国家レベルの国際美術展覧会 ・故国の有名芸術家の海外公演 ・海外の大使館による定期的な文化的催事

典拠：Alejandro Portes, Luis E. Guarnizo and Patricia Landolt, 'The Study of Transnationalism: Pitfalls and Promise of an Emergent Research Field,' *Ethnic and Racial Studies*, Vol. 22 No. 2, March 1999, p.222.

第５に、トランスナショナリズムという現象が成立するための条件とは何かを同定することが必要である。それらの条件としては①地理的距離と時間の短縮を可能にした航空機に代表される移動手段の飛躍的な発達。②国際電話・ファックス・電子メール・衛星放送などのコミュニケーション技術の目覚しい革新。③国境をまたいだ移住を支援する社会的ネットワークの確立である[33]。

＊　＊　＊

これまでわれわれは、現代アメリカの移民研究のなかでも、とりわけトランスナショナルな視座からの実証的な移民研究の系譜に焦点を当てて見てきた。そこから明らかになったことは、同じくトランスナショナリズム論を唱える研究者の間にも、用語法に見られる多義性、概念の不明確性、分析単位の曖昧性などをめぐって様々な議論が展開されつつあるという事実である。すなわち、トランスナショナルな移住が新しい現象であることを認め、トランスナショナルな視座からの研究の意義を認めながらも、そこには様々な議論の不一致が研究者の間に存在しており、トランスナショナリズム論が新しいパラダイムとして確立しているとは到底いえない状態にある。そこで次稿では、引き続きトランスナショナリズム論のその後の系譜を紹介すると同時に、そこにおける争点をより深く掘り下げて検討することにしたい。

《未完》

[33] *Ibid.*, pp.223~224.

NII-Electronic Library Service